

日伊女性国際会議報告書

人間文化研究科教授 石井クンツ昌子

私は日伊女性国際会議の「女性の生活：比較と歴史の視点から」というシンポジウムにパネリストとして参加した。このセッションの他のパネリストはトリノ大学サラチエーノ教授と参議院議員の円より子さんであった。シンポジウムの形式はまずパネリストが短いスピーチをおこない、その後ディスカッションに入るというものであったが、時間的な都合から主にスピーチと短い意見交換で終わった。しかしこのシンポジウム及び直前におこなわれたボーヴァ氏と羽入佐和子副学長からの両国の女性の状況に関する統計データ報告から得られたことは非常に多かった。特に興味深かったのは日伊の社会問題と女性に関する環境の共通点であった。

日本とイタリアの共通点として少子化と晩婚化があげられる。特に少子化は女性の高学歴化やキャリア志向により進んできたが、日本でもイタリアでもまだ、「男尊女卑」の傾向が強いことや、女性への家族と仕事の調和を促すような家族政策が充実していないのが理由としてあげられる。サラチエーノ教授の「男性が変わらなければ男女平等はあり得ない」という言葉がとても印象的であったし同感できることである。日本でも1998年頃より厚生労働省が中心となり少子化対策の一環として男性の育児参加の重要性を唱えてきた。しかし男性の育児休業取得率などを見るとまだかなり低く、やはり子育ての大半を女性が担っているというのが現状である。日本でも男性が積極的に育児参加をするなどのように変わらなければ女性の地位や生活も向上していかないであろう。

今後、女性がいかにして仕事と家庭のバランスを保っていけるのかということ考えた場合、日本においてもイタリアにおいても、意識と構造の両方の変化が不可欠である。例えば少子化対策のために男性の育児参加を社会があるいは政府が推奨しても、実際にそれをサポートできる構造がなければ不可能であろう。このような構造と意識の改革をいかにして同時に推し進めていくかが日本とイタリア社会の今後の課題であると思う。